

2006 年中国越劇芸術節報告

中山文 細井尚子

Fumi Nakayama

(神戸学院大学人文学部
人文学科歴史文化コース)

Naoko Hosoi

(立教大学社会学部
現代文化学科)

目次：

はじめに 細井尚子

観劇報告 (01 から 11 まで細井担当、12 から 23 まで中山担当)

- 01 開幕式と『姹紫嫣紅』
 - 02 『何文秀伝奇』 上海蕭雅文化芸術公司
 - 03 『紅色浪漫』 杭州劇院
 - 04 『楊貴妃後伝』 樂清市越劇団
 - 05 『唐婉』 福建省芳華越劇団
 - 06 『阿育王』 寧波市芸術劇院
 - 07 『趙氏孤児』 上海越劇院
 - 08 『民女封后』 余姚市芸術劇院
 - 09 『宦門浪子』 温州市越劇団
 - 10 『越女争艶』 折子戯専場 (若手優秀俳優選抜のコンクール)
 - 11 『白兔記』 嵊州市群芸越劇団
 - 12 『十八双繡花鞋』 杭州越劇院三団
 - 13 『蔡文姫』 嵊州市越劇団
 - 14 『梁山伯与祝英台』 浙江省小百花越劇団
 - 15 『五女拜寿』 杭州三江越劇芸術団
 - 16 『天道正義』 浙江省諸暨越劇団
 - 17 『蔡斎残夢』 寧波鄞州越劇団、上海越劇院一団
 - 18 『女兒湖』 南通芸術劇院越劇団
 - 19 『心比天高』 杭州越劇院
 - 20 『柳毅伝書』 南京市越劇団
 - 21 『玉卿嫂』 上海越劇院
 - 22 『越女三章』 紹興小百花芸術中心
 - 23 閉幕式と『越女三章』 紹興小百花芸術中心
- 終わりに 中山 文

はじめに

細井尚子

越劇 100 周年を記念する越劇祭が、中華人民共和国文化部和浙江省人民政府の主催により、紹興を中心に開催された。今回、中山と細井は紹興市の協力を得て 2 週間にわたる出品作品すべてを分担観劇した。以下はその報告である。

中国では 1906 年 3 月 27 日を越劇が最初に正式に上演された日とする。東王村の香火堂前に 4 つの桶を並べ、上に戸板を載せた仮舞台を作り、衣装をつけ、化粧をし

た、すなわち 1 人の演者が扮装して 1 人の登場人物に扮する形での上演を「正式に上演された」というのである。この後、町の芝居として生まれ変わり、演者も男から女に変わるという大変革を経験して現在につながるため、現越劇の源流がいつかと厳格に言うならば、1930 年代後半になってしまふ。越劇という劇種にとっては、時間的蓄積の量は問題ではない。1930 年代後半だったからこそ得ることができたものが個性になっており、短時間で凝縮した発展をしたために、現在も尚、発展する力を内包しているのである¹⁾。今回の越劇祭でも、伝統的な作品をそのままに演じるものではなく、脚本、演出、舞台美術、音楽、衣装、化粧など、あらゆる要素に「新」を加えた

ものばかりだった。

コンクール参加作品は20本+青年俳優対象コンクールで、審査員は主催と専門家で構成する組織委員会が人選したと言う。演劇関係者と文化関係役人で構成、コンクール参加作品によっては、審査員と制作スタッフが親密であるなど、審査員の身分を明かさない方針を徹底していたが、誰にとっても同じ距離であるという公平性を保つのはかなり難しいと思われた。

今回のコンクール作品で卑見したものについては、次の3点があげられる。

1) 作品のタイプ

日常生活の中の娯楽として、人々が気楽に楽しむものと、コンクールや芸術祭など、他地域の人々を観客として想定し、多額の予算をかけ、劇団外からスタッフを招聘するなどして作ったもの—前者を「普段着」、後者を「おでかけ着」と私自身が勝手に分けている—2つのタイプの作品が混在していた。両者は要求されているものが異なるため、1つの基準で優劣をはかるのは無理がある。また、9つの劇場で上演したが、各劇場の舞台機構などの条件が異なっており、もし、舞台上の作品のみで審査をするならば、非常に困難だったと思われる。

2) 舞台、衣装、化粧など

照明器具や舞台自体が可動するといった機構を整えた劇場が出現するに従い、もともとこうした舞台自体に芝居をさせる要素をもっている越劇では、それを計算に加えた演出が行われるようになってきた。卑見で最も舞台機構を駆使したのは『阿育王』だが、まだ不必要に多用する面があり、舞台機構を使いこなせていない印象が残った。

衣装、化粧の面では、越劇の規則は他に比べてもともと拘束力が弱い。今回も新デザインが多かったが、衣装、髪型、化粧とも、各劇団の作品に沿った個性というよりは、似通ったものが多く、流行があるようだ。これは、制作スタッフが複数の作品で重複しているのとも関係するかもしれない。

3) 様々な試み

新作、改編の他、従来の越劇には少なかった外国物も加わるなど、様々な試みが行われていた。外国物を舞台化するには、翻案と翻訳の2種があるが、今回の2作品はどちらとも言えない形になっており、今後どのような作品群が生み出されるのか楽しみでもある。

越劇は、文革後スターが否定された後も結果的にスター制を残しており、俳優の魅力で吸引する大衆娯楽路線の道を歩んで来た。解放後に男の登場人物は男優が、女の登場人物は女優が演じるという方針のもと、女形養成が公式に行われなくなるのと同じく、越劇では男優養

成が行われた。しかし今でも舞台上で男優が活躍する劇団は圧倒的に少なく、更には女優のみの劇団と男優がいる劇団では演目の選択に多少の相違が見られる。全国一斉に行われるこうした文芸政策を必ずしも受け入れず(受け入れ切れず)に独自の道を拓いて来た越劇には、スターの高齢化問題もある。今回の作品群を通じ、新しい道の模索を痛感したが、それがどういう道なのかは見えてこなかった。

また、今回の越劇祭期間には、「黄酒(紹興酒など米醸造酒)節」「国際紡績品博覧会」「第7届国际職業(靴下業)博覧会」「第7届領帯(ネクタイ)節」等の御当地特産品物の普及・販売促進活動、「旅遊(旅行)節」、「浙江第4届家私(家具)博覧会」、宝石・工芸品オークション、投資に関する説明会・調印式、「第4届百名海外内博土紹興行系列活动」なども個々に独立して開催された。このように官主催の芸術祭と経済貿易活動を合体させたイベントは、90年代から見られるようになった。その地域の知名度をあげ、経済効果を期待するものだが、どの程度の成果があったのだろうか。越劇祭に比較的關係のあるものとしては、紹興図書館で10月17日に記念式典を行った「中国戯曲罔(ネット)」の開始くらいだろうか。これは、戯曲ジャンルの書籍の所蔵が充分ではない紹興図書館が、一般販売されている戯曲ジャンルのVCD、DVDを大量に購入、パソコンでそれを見ることができるというもので、演目としては1200作あるという。しかし、著作権の関係で、館内のパソコン(企業からの寄付)でのみ鑑賞可能。入り口では地元の女性有志による民間舞踊が行われ、要人の挨拶で始まる記念式典はテレビカメラも入り、あらかじめ待機していた学生や兵士の団体が、合図とともに会場に入り、閲覧するなど、力が入ったものだった。私自身も実際に見てみたが、戯曲ジャンルに入る劇種は多いため各劇種を満遍なく網羅するのは難しく、また一般販売されたものを収集するので、劇種による量の差は激しく、貴重な映像はない。研究用というよりは、一般普及用であるが、未所蔵の劇種118については資料を作成しており、これを見ると民俗芸能やかなり限られた地域のものも収集対象としていることが分かる。この図書館の素晴らしい仕事は、全国に存在する戯曲ジャンルの劇種の現状を独自調査している点にあるだろう。全国調査は1981年に統計が出されているがその後はなく、また、1980年調査時には民族文化発揚政策が反映しており、実態はどうか不確かな面もあった。限られた資金と人数で地道な調査を展開しており、その中間報告の形ですでに失伝、あるいは失伝の危機にある劇種のリストと資料が、壁面に貼り出されていた。全て実際に調査して確認したものという。残念な

のは、この資料を見る人がほとんどいなかったことで、テレビカメラとともに誰もいなくなってしまった会場で、お祭りにして行うことの違和感を感じた。

細井はこの越劇祭期間中に観劇できなかった作品で、越劇を牽引する一翼である浙江省小百花越劇団の『梁山伯与祝英台』と、今回越劇祭には参加していなかった『春琴伝』を北京で11月7、8日に観劇した。『梁山伯与祝英台』については、どの作品も同じ演出手法になってしまいう限界が、また『春琴伝』については、海外物を上演する際の文化コードの理解と読み替えの困難さを感じた。

〈データ編〉

I 2006 年中国越劇芸術節

主催 中華人民共和国文化部、浙江省人民政府

引受機関 浙江省文化庁、紹興市人民政府

期間 2006 年 10 月 16 日（開幕式）～ 28 日（閉幕式）

コンクール参加作品 20 本

青年俳優コンクール 1 回

上演地 浙江省：紹興、寧波、杭州、蕭山、嵊州、余姚
にある 9 つの劇場

II 観劇した作品

01 10 月 16 日（月）

演目名 『姹紫嫣紅』（開幕式）

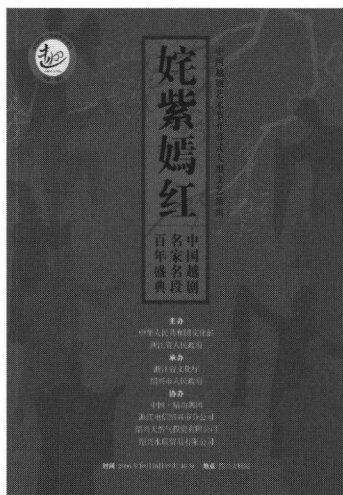
劇場（場所） 紹興大戲院（紹興）

上演時間 2 時間

チケット 非売

プログラム 有 非売（座席に 1 部ずつセッティング）

観客 男女ほぼ半分・中高年主体 ほぼ満席



〈内容〉

幕間はないが、二部＋フィナーレ構成。第一部は主催団体や著名人の挨拶。第二部は梅花獎受賞者による見せ場のみの公演。第二部の演目名と出演者：

『春香伝』『愛歌』陳曉紅・張小君

『盤妻索妻』『洞房悄悄』蕭雅

『五女拜寿』『哭別』董柯娣

『碧玉簪』『三益衣』謝群英

『陸文龍』『歸宋』吳鳳花

『白蛇伝』『西湖山水』黃美菊

『梁祝』『十相思』章瑞虹・陳飛

『刑場上的婚礼』『春天已經到羊城』舒錦霞・張伝忠

『婚姻曲』選段 王杭娟

『西廂記』『琴心』陶琪

『打金枝』選段 陳輝玲

『沙漠王子』『算命』趙志剛

『紅樓夢』『葬花』単仰萍

『陸游与唐琬』『浪迹天涯』茅威濤

どの場もその他大勢の舞踊が付き、舞台機構をフル活用する。越劇の様々な流派の歌唱が聞けるのでお得感はあるが、あまりにも 1 つずつが短い。

フィナーレは体育学院の学生が古裝で戯曲の型を交えた舞踊を行う。身体が戯曲の身体ではないので、越劇の俳優の動きと不調和なのが残念。地元の戯曲学校の学生や劇団の若手を起用できなかったのだろうか。最後に宝塚歌劇の銀橋調に客席に張り出して作った細い舞台に越劇俳優が並ぶ（演出家は楊小青）が、客席との距離が広く、照明が全体を明るくするもので宝塚の効果はなく残念。

〈所感〉

「中国越劇芸術節開幕式大型文芸演出」「中国越劇 名家名段 百年盛典」と付せられたタイトル『姹紫嫣紅』は、花々の美しさを表すもの。

紹興の中心部にある紹興大戲院は、大きな公園の中にあり、道路から遙かに仰ぐ紹興大戲院までの通路には赤い絨毯が敷かれ、上には越劇史の重要事項が年代順に金のテープで貼ってある。化粧・扮装をした若手俳優が複数出て観客を出迎える絨毯脇の広場では、今回の越劇祭のコンクールに参加できない劇団が上演しており、賑わっていた。紹興大戲院の入り口の階段前の空間には、両脇にグランドピアノが 15 台ずつ並べられ、越劇の作品の曲を演奏。その中を嚴重な手荷物検査を受けて入場する。もののしさと華やかさに、今回の越劇祭がいかに力を入れたものなのか、開幕式前から分かる仕掛けが満載である。リハーサル中に楽屋に入った時には、スタッフの多さと劇場全体を包む興奮状態に驚いた。国や

地域の政府がかむ芸術祭は、大体こういう形になり、通常の観劇行為とは全く異なった世界になる。

開幕式のチケットは一般には売らず関係者に配付したそうで、かなり立派な装丁のプログラムが座席に一部ずつ置かれているのも、特別感を強めていた。客の服装も、普通は日常着で気楽に見るものだが、いわゆるお出かけ着の人がほとんど。また、ひとりで来ている人も多かった。開幕式前、客席に向かって「テレビ局が3つ入っている、途中で席を立つな。大きな声でおしゃべりするな」と注意事項があった。この場にいる客は単なる目撃者で、気楽に舞台を楽しむ中国的な観劇環境は許されていないのだ。開幕式が終ると、空席のプログラム争奪戦が行なわれ、あっという間になくなった。観客を出してすぐ、録画に失敗したフィナーレが撮り直された。最後まで見ていたら劇場入り口が閉められていて出られなくなった。通用門から正面に回ると、外のグランドピアノも両脇各々1ヶ所にまとめられ、赤い絨毯を気にせずローラースケートなどで遊ぶ若者の一群しかおらず、開幕式にもかかわらず、もはや祭が終わったかのようだった。

02 10月17日(火)

演目名 『何文秀伝奇』

劇場(場所) 紹興劇院(紹興)

上演時間 2時間20分

上演団体 上海蕭雅文化芸術公司

チケット 80元、50元、30元、20元、10元

プログラム 有 3元

観客 女性主体・高齢者主体 8割程度

〈内容〉

尹桂芳上演台本の改編版。明代の話。嚴嵩は何長官を陥れ、一族を殺害する。何長官の息子の文秀は闇夜にま

ぎれて嚴嵩一派の王家に逃げ込み、娘の蘭英に助けられる。蘭英は文秀を伴い海寧の親戚の家を目指す途中、二人は結婚する。目当ての親戚は何長官に連座して出兵させられており、やむなく文秀は身をやつして書画を売って暮しを立てる。当地の張堂は嚴嵩を義理の父と仰ぐ悪者だが、蘭英の美貌に魅せられる。文秀夫妻を自宅に招いて文秀は逃亡中の政治犯と正体を暴き、離縁状を書くよう迫るが文秀は拒絶する。張堂は下女の梅香が蘭英を逃したことを知って殺害、殺人の罪を文秀になすりつけ、逮捕、投獄させる。海寧の王知事は嚴嵩を恐れ、張堂と謀って文秀を殺害しようとする。しかし、監獄の番人王義は文秀を救って監獄に火を放ち、一緒に逃亡する。張堂は蘭英の行方を探し求め、楊媽媽の家を捜索しに行くが、武術の心得がある楊媽媽は追い返し、匿っていた蘭英を連れて逃げ出す。

三年後、嚴嵩は獄死、朝廷は賢人政治に戻り、文秀は科挙に合格、父の汚名を晴らすべく海寧に戻って来る。占師に変装して妻のもとを尋ね、王知事と張堂の告訴状を書くのを手伝い、自ら裁判を行って二人を断罪、人々のために悪を除き、夫妻は再び結ばれる。

〈スタッフ〉

脚本 李惠康

演出 查明哲

音楽顧問 連波

作曲 顧達昌

唱腔デザイン 陳国良

舞台美術 桑琦、王韋予

照明 邢辛

衣装 李銳丁

振付 孫大西

〈主たる配役〉

何文秀 蕭雅

王英蘭 陳歆

楊媽媽 何娟娟

〈所感〉

今回参加する民間劇団3つの内の1つ。蘭英役の陳歆の音域が低く、文秀役の蕭雅とほぼ同じで掛け合いの重層さが出ない。特に舞台機構も整っていない劇場だが、舞台は八百屋(舞台奥の床を高くして傾斜をつけた舞台)に作り、一応流行を押さえていた。客席の反応はよく、終演後に観客が舞台前に詰め掛け、蕭雅が話しかける光景も。蘭英役始め、主要な脇役陣は他劇団からの借り物。演出、音楽、舞台美術などのスタッフも外部から招いているが、こういう形は主流になりつつある。

〈備考〉

蕭雅は尹派の小生。1982年上海戯曲学校卒業時から歌



唱力が特に秀で、越劇、歌劇などの舞台で活躍。「月亮走、我也走」が大ヒット。1991 年アメリカに渡るが 98 年に帰国、現代音楽、昆劇も学び、2002 年に自分の上演グループである上海蕭雅芸術工作室を設立した。私立劇団の主宰者かつ主演俳優では初めて梅花獎（第 21 回）を獲得した。

03 10 月 17 日（火）

演目名 『紅色浪漫』

劇場（場所） 杭州劇院

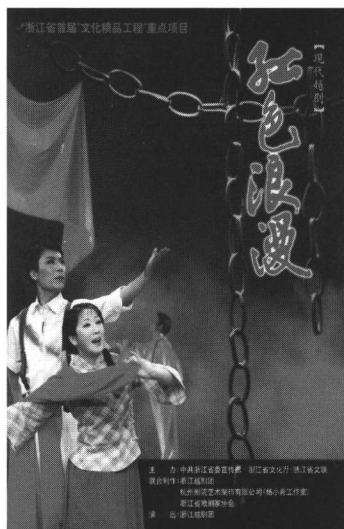
上演時間 2 時間 10 分

上演団体 浙江越劇院

チケット 120 元、80 元、50 元、30 元

プログラム 有 不明

観客 男女ほぼ半分・中年層主体 8 割程度



〈内容〉

ドキュメンタリー文学『紅岩魂』の舞台化。解放直前の重慶。医科大学の女学生曾紫霞は共産党の地下黨員でもある。同じく地下黨員の劉国鈺との間に淡い恋愛感情を持っているが、劉が豊かな商家の出身のためにお坊ちゃん風のところがあるのが残念で、同じ地下黨員の熊咏輝と書記を勤める李文祥のカップルを羨ましく思っている。密告により、曾、劉、熊、李は一斉逮捕、投獄される。李はリンチに耐えかね、ついに仲間の名前を白状すれば解放するという誘いに乗り、曾が地下黨員であることを話してしまう。熊はそんな李と決別、劉と曾は互いの愛情が本物であることを確かめ合うが、劉は死刑になる。

〈スタッフ〉

脚本 呂建華、黄先鋼、陳志軍

演出 楊小青、周云娟

音楽顧問 連波

作曲 王天明、劉建寬、陳国良

唱腔デザイン 胡夢橋、劉建寬、陳国良

舞台美術 田立為

照明 周正平

衣装 藍玲

振付 段建平

化粧 陸怡

道具 葉林彬

音響効果 潘小明

〈主たる配役〉

劉国鈺 華渭強

曾紫霞 陳芸

李文祥 張偉忠

熊咏輝 廖琪瑛

〈所感〉

全 8 場のうち 7 場が監獄のシーンで何とも暗い。また、こういう作品は先が読めてしまうのも辛い。監獄場面の舞台装置は左右と正面を区切り、正面は二階にして、全ての場面に対応、立体感があった。主役の劉を演じた華渭強には熱烈なファンがいて、出て来る度に、演技の間に嬌声がすごい。暗い話に場違いな嬌声。革命の犠牲者を讃える路線の作品だが、客席は全く関係なく現代なのだった。

〈備考〉

「浙江省首屆“文化精品工程”重点項目」の作品。主催は中国共产党浙江省宣传部、浙江省文化庁、浙江省文联。連合制作団体として浙江越劇団、杭州劇院芸術制作有限公司（楊小青工作室）、浙江省戲劇家協會の名が並ぶ、党と政府の肝入りの作品。

04 10 月 18 日（水）

演目名 『楊貴妃後伝』

劇場（場所） 紹劇芸術中心（紹興）

上演時間 2 時間 15 分

上演団体 樂清市越劇団



チケット 100 元、80 元、50 元、30 元

プログラム 有 5 元

観客 女性主体・青高齢者主体 8 割程度

〈内容〉

賢帝と讃えられた玄宗は、楊貴妃を得てから政治が腐敗、安祿山が叛乱を起こし、長安に近づく。玄宗は楊貴妃を連れて逃げ、太子が軍を掌握、宰相楊国忠を殺し、玄宗に楊貴妃を絞殺する命を出すよう迫る。楊貴妃は日本の遣唐使藤原刷雄の助けで日本に逃げ延びる。高力士が日本に楊貴妃を尋ね、楊貴妃は夢の中で玄宗と再会する。

〈スタッフ〉

脚本 尤文貴

演出 俞珍珠

作曲 劉建寬

唱腔デザイン 胡夢橋

舞台美術 戴曉云、許希禔

照明デザイン 周正平

衣装 蘭玲、張穎

振付 楊允金

道具 李如松、張文松

演技指導 王鳳鳴、張腊嬌

〈主たる配役〉

楊貴妃 周妙利

李隆基 童紅霞

高力士 胡小敏

藤原刷雄 呉魯錦

〈所感〉

舞台面は華やか。衣装代だけで4万元以上かかったという。一部で八百屋舞台を使用。しかし、筋の展開もだが、遣唐使の服装や、彼の日本の屋敷の席で江戸風俗の女性たちが下駄を履いたまま踊るなど、やたらと冷める箇所が多く、舞台上の世界から離れさせられてきつい。玄宗は50歳から80歳まで3段階の化粧・扮装をするが楊貴妃は変わらず。

ともかく、外国のものを取り込む時のデフォルメの仕方について考える機会になった。

〈備考〉

「楊貴妃の生死については唐代からすでに諸説があり、日本に楊貴妃の墓が二ヶ所あること、楊貴妃の子孫という日本の少女がテレビ出演したことから着想を得た。両国の交流の長さ、文化交流の密接さ、中国文化が日本に与えた影響の深さについても証明する作品」だそう(プログラム「前言」より)。

日本には青森にキリストの墓もあり、心情的に判官鼻眞という気質が、こういう作品を結実させるとは思わな

かった。

05 10月18日(水)

演目名 『唐琬』

劇場(場所) 紹興大劇院(紹興)

上演時間 2時間10分

上演団体 福建省芳华越劇団

チケット 160 元、120 元、80 元、50 元

プログラム 有 20 元(雑誌「福建劇談」付き)

観客 女性主体・中年層主体 ほぼ満席



〈内容〉

南宋の話。陸游の妻唐琬は姑に嫌われ、陸家を追い出される。陸游は別れに臨んで唐琬に、心の苦しみと再会の機会が来るのを待ってほしいと伝え、唐琬は陸游の友人趙士程の家に身を寄せる。一年後、陸游からの連絡を待つ唐琬のもとに、陸游が王家の娘と結婚するという知らせが来る。唐琬は悲しみと怒りに包まれ、陸游に仕返しをしようと同じ日に趙士程と結婚することにする。趙士程は唐琬の申し出に驚くが、好意を持っていたので受け入れる。結婚当日、唐琬は陸游のことばかりに気持ちが向いてしまうが、そんな唐琬を理解し、見守る趙士程の優しさに気づき、二人で幸せを築こうと決意する。八年後の春、趙士程と沈園に散策に出かけた唐琬は、陸游も来ていることを知る。今の幸せを思い、昔のことを語るまいとした唐琬は陸游に酒を送る。陸游は後悔と申し訳なさから「釵頭風」一詩を書く。それを見た唐琬は、心の奥でまだ陸游を愛していることを悟るがどうしようもなく、趙士程に負い目を背負って生きて行く。

〈スタッフ〉

脚本 王仁傑

演出 鄭大聖

芸術指導 梁谷音

作曲 朱立熹

唱腔デザイン 胡夢橋

舞台美術・照明 胡燕燕

技術指導 王宝亮

衣装 王玲

化粧 董絵

〈主たる配役〉

唐琬 李敏

陸游 王一敏

趙士程 邢麗華

〈所感〉

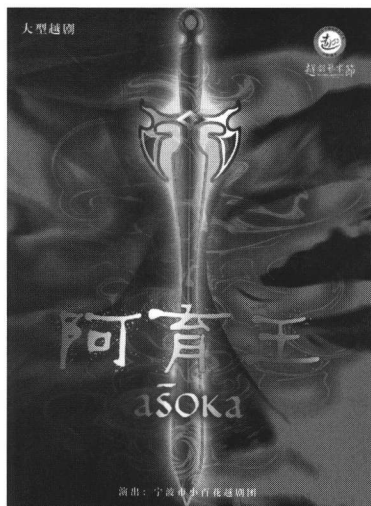
唐琬が陸游への復讐として趙士程と結婚する、という一点で従来の悲劇的な純愛物から全く異なった印象を与える作品になった。これではおそらく脇役の趙士程の「良い人」性だけが目立ち、観客の同情は趙士程のみに集まるだろう。陸游はただの軟弱な男。唐琬は、女性は意志をもつと損をするという、おそらく脚本家が予想しなかったであろうメッセージを発信する存在になってしまった。これが「現代性」なのだろうか。キャスティングと演出処理の関係か、陸游、趙士程が唐琬に比べると非常に幼く、お姉さんと弟達という印象である。

〈備考〉

福建省芳华越劇団は小生尹桂芳が作った劇団。この作品はもともと小生（陸游）が主役のものだが、それを唐琬にした改編。06 年は福建省芳华越劇団の創立 60 周年で、その記念碑的作品でもあり、プログラム以外に記念本、雑誌も販売していた。芸術指導として上海昆劇の梁谷音を招聘。しかし唐琬の表現に、昆曲の青衣がもつ力や品位を付与できていない。梁谷音は青衣というより、もう少し個性のはっきりした強い役柄で群を抜く俳優であること、上海昆劇が昆劇の中では京劇に近いことを思えばやむをえないか。

06 10 月 19 日（木）

演目名 『阿育王』



劇場（場所） 寧波大劇院（寧波）

上演時間 2 時間 15 分

上演団体 寧波市芸術劇院

チケット 120 元、80 元、50 元、30 元

（夜公演 180 元、120 元、80 元、50 元）

プログラム 有 無料

観客 男女ほぼ半分・各年齢層が満遍なくいる ほぼ満席

〈内容〉

インドのアショカ王伝説に基づく。孔雀王朝の若き王子アショカは、その非凡な才能のために異母兄に嫉妬されていた。アショカは母の助けで王宮を離れ、遊行に出る。その途中、クーデターで宮中を追われた姫君カーワルに出会う。パーマと名乗ったアショカはカーワルともめ事になるが、それを通じてかえって愛情で結ばれる。しかし母危篤の知らせを受け、アショカは王宮に戻ることにになり、カーワルと別れる。王宮に戻ったアショカは、これがアショカを戻すための陰謀だと知る。更にカーワルが焼死したという知らせが。また、母が自分を守るために惨殺されたことを知り、アショカは憎しみから剣を持つ。異母兄と父を殺し、血によって歴史に名を残す偉業を打ち立てようと各地に遠征、戦争を仕掛ける。愛するカーワルの国とも戦い、それとは知らずカーワルたちも殺してしまう。残酷な戦争によって領土や権力を得たアショカは、戦争によってあらゆるものを失ったことを知り、仏教に帰依し、愛と平和の大切さを国土に広めた。

〈スタッフ〉

脚本 王晓菁

演出 張曼君、王乃興

作曲 吳小平

唱腔デザイン 劉建寬

舞台美術 馬連慶

照明 薄孝波、楊志軍

衣装 馬穎

道具 張海祥

〈主たる配役〉

阿育王 張小君

卡瓦（カーワル） 謝進聯

〈所感〉

コンクール参加の海外物取材作品 2 本のうちの 1 本。翻案物ではなく、翻訳物としてはかなりまとまっているが、アショカの王子としての位置など脚本がやや書き込み不足。舞台機構をフル活用し、舞台が割れたりくっついたり、舞台自体に芝居をさせる演出。また、八百屋を多用。越劇としてのアイデンティティは歌唱のみだが、発声法が西洋音楽、というかオペラ風。それでも効果音

やBGMなどと歌唱が全く別分野の音楽で、この作品を越劇でやる必然性を感じない。衣装、化粧、髪型とも新作。

〈備考〉

アショカ王はマウリヤ朝第3代の王で、インドを統一し、仏教を保護した王とされる。在位は紀元前268-232年だが、生没年は不明。カリンガ王国征服の際、あまりにも残酷な戦争を行ったことを反省し、仏教に帰依したとされるが、アショカ王暴君説は証拠がなく、後の創作とされている。寧波には阿育王ゆかりの寺があり、この寺の映像が映され、またこの寺の僧侶が団体観賞していた。

当初、この作品は越劇らしくないと不評で、演出と作曲、照明、衣装の担当者を変更して改編、05年11月の第9届中国戯劇節で中国戯劇奨と優秀戯目奨を受けている。プログラムには当初のスタッフ名と紹介が載っており、改編版スタッフは別紙で1枚、プログラムに挟まれていた。

07 10月19日(木)

演目名 『趙氏孤児』

劇場(場所) 肅山大戯院(肅山)

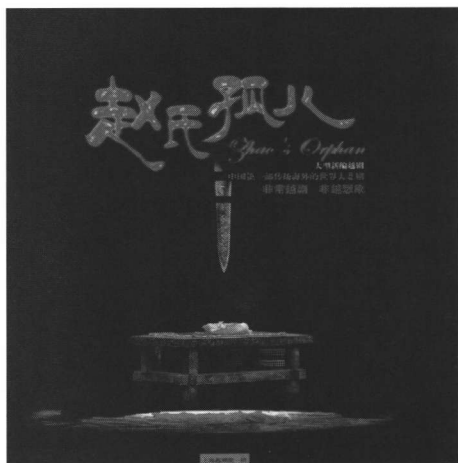
上演時間 2時間30分

上演団体 上海越戯院

チケット 非売(配付)

プログラム 有 10元

観客 男女ほぼ半分・中年層主体 ほぼ満席



〈内容〉

春秋時代、晋の三代にわたる忠臣趙盾は、屠岸賈に陥れられ一族殺害に処せられる。妻庄姫は、生まれたばかりの息子趙朔を出入りの医者程嬰に托す。屠岸賈は趙朔がいらないのを知り、差し出さなければ全国の同じ歳の子を殺すと布告、程嬰はやむなく自分の子を趙朔と言って

差し出す。程嬰は忠良の家の跡取りを差し出したと周囲から冷たい仕打ちを受けながらも、趙朔を程武と名付け育てる。屠岸賈は程武を義理の息子として可愛がる。程武が16歳になった時、程嬰は全てを程武に伝え、程武は趙朔として屠岸賈を討つ。

〈スタッフ〉

脚本 余青峰

演出 王曉鷹

振付 信洪海、王振鵬

作曲 藍天

作曲、唱腔デザイン 陳鈞

舞台美術 劉科棟

照明 劉建中

衣装 王笠君

道具 王欽

〈主たる配役〉

程嬰 趙志剛

程王民(程嬰の妻) 孫智君

庄姫 何英

屠岸賈 許傑

程武(趙朔) 齊春雷

〈所感〉

1973年生まれの脚本家と戯劇の演出家とのコラボレーション。演出における群衆と仮面好きは戯劇系演出家のお約束なのか、これも多用。しかし用い方に疑問。また、仕草などの演出が細かすぎて、越戯などの「戯曲」ジャンルがもつ観客の想像力に任せる演出処理に比べて、舞台上の世界が小さい印象が残る。

趙志剛中心のキャスティングは、いつも同じ俳優になるが、役柄と合っていない俳優も。舞台装置、音楽が優れていた。

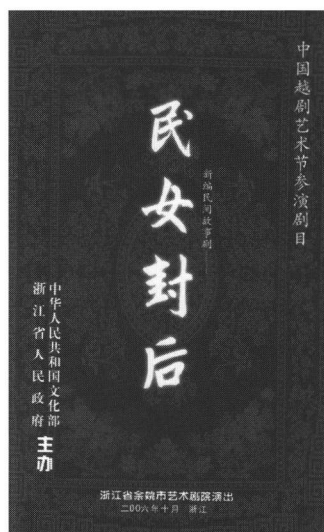
〈備考〉

趙志剛は21人いる越戯の梅花奨受賞者の内、唯一の男優。「女が演じる男」を演じられる男優として「越戯王子」と呼ばれるが、加齢による声や体の変化を誰よりも自覚し、すでに90年代後半からドラマ性の強い作品路線への変更を模索、「越戯王子」からの脱皮を図ろうとしてきた。しかしそれでも『趙氏孤児』の程嬰(主役だが中高年役)を演じるというので、初演時(04年)から関心を集めた作品。ドラマ性を求めるならば、キャスティングにおいて俳優中心でいくか、役柄中心でいくかをもう検討すべき時期ではないだろうか。

08 10月20日(金)

演目名 『民女封后』

劇場(場所) 余姚龍山戯院(余姚)



上演時間 2 時間 20 分

上演団体 余姚市芸術劇院

チケット 非売 (配付)

プログラム 有 無料

観客 女性主体・中高年層主体 8 割弱

〈内容〉

正義心に溢れた張桂蘭は、敵に追われて逃げてきた皇太子を咄嗟の機転で助けるが、名を聞かれて張布蘭と名乗る。3 年後、皇太子は皇帝に即位、命の恩人を探させるが、張桂蘭は幼馴染みの田水郎と離れるのがいやで、村中の家に布で旗を作って立てさせる。当地の賈知県 (県の長官) は、張布蘭探しの邪魔をしたと桂蘭を引き立て、張布蘭探しの命を受けて王宮からやってきていた曹士彬に会わせる。この曹士彬こそ敵として皇太子を追っていた男だった。曹はすぐに桂蘭を投獄、当地の賈知県 (県の長官) は、自分の娘を張布蘭と偽って王宮に送る。皇帝は偽布蘭が当時の記憶とは異なると思いつつも愛情をもつ。しかし尚書の徐直の言葉を受け、占師に変装して賈知県の家を尋ねて真相を知り、獄中の恩人に会う。桂蘭は占師に変装した皇帝の勧めに従い、裁判で皇帝を訴え、事の次第を明らかにし、解放されて村に戻る。皇帝は桂蘭を宮中に迎えるため、自ら花嫁の衣装と輿を整えて桂蘭のもとへ行くが、桂蘭は田水郎に嫁ぎたいと断り、花嫁の衣装と輿を村に留め、村の娘が嫁ぐ時に使えるようお願い出る。皇帝は「民間女子尽封后」(民間の女子はことごとく后となす) としたため、その願いを聞き入れる。

〈スタッフ〉

脚本 張金海

演出 呉伯英

技術指導 鮑玉英

作曲 金良

舞台美術 周樹夫、王森苗

照明 潘家瑜、朱建樞

衣装 藍玲

化粧 張琦

〈主たる配役〉

張桂蘭 王秀蘭

田水郎 繆慧琴

皇帝 俞亜華

〈所感〉

前半の展開はかなり早いですが、皇帝即位後はやや沈滞。大衆性がかかなり強い演出。分かりやすいが、味わうという舞台ではない。賈知県の娘が善良で、自分が偽布蘭であることをあかし、この謀は自分の責任と両親をかばう。両親は娘の行動に反省する、という副筋も。観客は客席で食べる、おしゃべり、携帯電話で大声で話すなどやり放題。同じ賑やかでも、従来の舞台を楽しむ賑やかさとは異質。隣の席の若い女性があまりに電話をかけ続けるので、外でかけてはどうかと言ったら、「この町ではこれが当たり前。うるさいと思うなら来るな」と逆にどなられて、へこんだ。

〈備考〉

大型と銘打つ作品と、こういう大衆的な作品を同列に並べてコンクールを行うのは、審査基準がかかなり難しいだろう。

09 10 月 20 日 (金)

演目名 『宦門浪子』

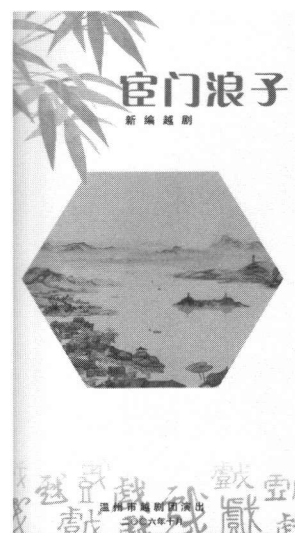
劇場 (場所) 紹興劇院 (紹興)

上演時間 2 時間 10 分

上演団体 温州市越劇団

チケット 120 元、80 元、50 元、30 元、20 元

プログラム 有 無料



観客 男女ほぼ半分・各年齢層満遍なくいる ほぼ満席
〈内容〉

南宋時代。演劇の盛んな温州の知事の息子、馬倚天は偶然見た芝居に夢中になり、追っかけをする。一座の名は春甌戲班、芸も美貌も優れた主演女優の王君芳に弟子入りしたいと願ひ出る。馬倚天の父馬伯宗は芝居は遊びにすぎないという考えの持ち主で、息子の行状に驚き怒って書斎に閉じ込め、春甌戲班には温州から立ち退くよう命じる。馬倚天は芝居を諦められず、書斎から逃げ出して王君芳を探しに行く。その頃、悪僧の祖傑が別の一座の女優李紅香に言い寄り、拒まれたので殺害するという事件が起こる。馬伯宗は祖傑を罰するべく動くが、祖傑は宮中に顔が効くため、逆に馬伯宗が職務を解かれ、身分を三階級落とされる。半年後、馬倚天は苦労の末、同郷の芝居好きの商人たちに助けられ、臨安にいた春甌戲班を尋ね、試験を受けて座員になる。父の話を聞いた馬倚天は、祖傑の悪行を暴露した『祖傑』を上演、大人気となり、庶民に怒りが広がる。朝廷はやむなく祖傑を処罰、父馬伯宗も復職する。馬伯宗も妻の勧めで『祖傑』を観劇、息子が書いた作品と知り、法律で処すことができなかったものを芝居の力でできたことに驚くとともに、父子再会、馬倚天と王君芳もめでたく結婚する。

〈スタッフ〉

脚本 張思聰

演出 童薇薇、張傑

作曲 顧達昌

唱腔デザイン 呉尚義

舞台美術 朱吉慶

衣装 藍玲

照明 李先桂

〈主たる配役〉

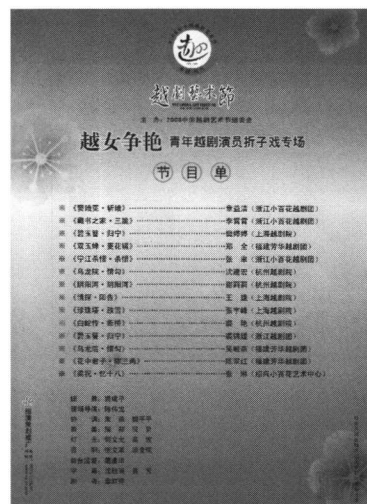
馬倚天 黄燕舞

王君芳 周燕萍

馬伯宗 鄭曼莉

〈所感〉

これも非常に大衆的な作品。客が聞きたいことを言い、見たいものを見せる。しかし演技が着ぐるみのみで、



劇場(場所) 紹劇芸術中心(紹興)

上演時間 3時間

上演団体 複数劇団

チケット 120 元、80 元、50 元、30 元

プログラム 有 無料

観客 女性主体・中高年主体 6割程度

〈内容〉

30歳未満、3級以下の俳優を対象にしたコンクール。13名から「十佳」を選ぶ(1名欠場のため)。演目と出演者:

『寶娥冤』『斬娥』 章益清(浙江小百花越劇団)

『藏書之家』『三跪』 李霄霄(浙江小百花越劇団)

『碧玉簪』『歸寧』 樊婷婷(上海越劇院)

『双玉蟬』『菱花鏡』 鄭全(福建芳華越劇院)

『宋江殺惜』『殺惜』 張聿(浙江小百花越劇団)

『烏龍院』『情勾』 潘建宏(杭州越劇院) ←欠場か?

『陰陽河』『陰陽河』 謝莉莉(杭州越劇院)

『情探』『陽告』 王婕(上海越劇院)

『珍珠塔』『跌雪』 張宇峰(上海越劇院)

『白蛇伝』『断橋』 裘艷(杭州越劇院)

『碧玉簪』『歸寧』 裘錦媛(浙江越劇団)

『烏龍院』『情勾』 吳敏燕(福建芳華越劇院)

『花中君子』『陳三面』 陳翠紅(福建芳華越劇院)

〈備考〉

コンクールなのに、結果の発表はしないで終了。最後に作品コンクールと一緒に結果発表するのだろうか。ところでこの劇場にはチケット売場も事務所もない。よく来るという観客に聞くと、ここは紹劇のための劇場だが公演数が少ないこと、チケットは普通は無料配付、とのこと。紹興中心部からの交通はやや不便だが、市内にある。ここに来ると、毎回近所の男の子たちが劇場入り口の階段や廊下などで、走ったり飛んだりして遊んでいる。

11 10月21日(土)

演目名 『白兔記』

劇場(場所) 嵊州劇院(嵊州)

上演時間 2時間35分

上演団体 嵊州市群芸越劇団

チケット 不明(配付か?)

プログラム 無

観客 女性主体・各年齢層が満遍なくいる ほぼ満席

〈内容〉

五代十国時代、沙陀国の劉知遠は馬の放牧を業とするが、李家に婿入りする。妻李三娘の父が亡くなると、兄嫁は遺産を全部欲しいがために、劉知遠夫妻を迫害、劉知遠は従軍させられる。李三娘は使用人以下の扱いに耐え息子を出産、臍の緒を自分の歯で噛み切ったことから咬臍郎と名付ける。兄夫婦は咬臍郎を殺すべく、養魚池に投げ込むが、古くからの使用人が助け、劉知遠のもとに届ける。負傷していた劉知遠は人を派遣して妻を探させるが、兄嫁はすでに別の人に嫁いだと告げる。16年後、李三娘が水汲みのために来た井戸端で、矢を射られた白兔を発見、射った本人である若い将軍劉承佑が来て、李三娘の話を聞き同情し、必ず不義理の夫を探すと約束する。劉知遠は負傷して生死の境にあった時、看病してくれた岳氏と結婚していた。劉承佑は帰宅後、李三娘の話をし、手紙を父に見せる。全てが明らかになった劉知遠は劉承佑に真実を伝え、岳氏の勧めもあって李三娘を救出する。

〈スタッフ〉

不詳

〈主たる配役〉

李三娘 包小云

劉知遠 周彩琴

劉承佑 葉笠琴

〈所感〉

劇場に何の機構もなく、非常にシンプルな演出。小さい子供を連れた観客が多いが、着飾った子供も多く、大

人も子供もみんな一生懸命見ている。舞台上に対する反応がよく、にぎやかだがうるさくない。昔ながらの娯楽的な空間。上演中に舞台下まで出て来て写真やビデオを撮りまくる人多数。

〈備考〉

甌州は越劇の発祥地。元代の南戯『劉知遠白兔記』を明代に改編したものがもとになっている。

(以上、細井担当)

12 10月22日(日)

演目名 『十八双繡花鞋』

劇場(場所) 蕭山大劇院(杭州)

上演時間 2時間10分

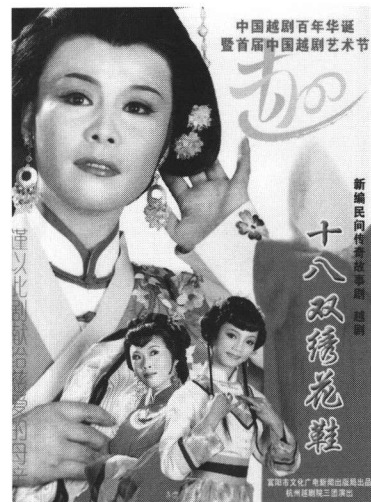
上演団体 杭州越劇院三団

チケット 不明(配布か?)

プログラム 有 無料

観客 老若男女が満遍なくいる。子供も多い。

男性4、女性6の割合で、75%の入り。



〈内容〉

農婦春月が旅人に頼まれ、彼の娘の世話をやいている最中に戦乱が勃発。旅人は春月の娘を連れたまま行方知れずとなる。彼女は手に残った女兒燕子と戦乱孤児の男児天宝を養子として育てる。18年後天下は太平となり、天宝は臨安から恩師の一人娘金鳳を嫁にして帰宅する。わがままな金鳳は病弱な姑を嫌う。姑が肌身離さず持ち歩く、宝物の入った赤い箱を、自分ではなく燕子に譲るつもりだと邪推して怒り、姑を別居させるよう夫に迫る。妻と母に引き裂かれる天宝、母に寄り添う燕子、金鳳の実家でも波乱が起きる。結局宝物とは、春月が毎年生き別れた娘の誕生日に作ってきた18足の靴で、金鳳こそが実の娘だと判明する。

〈スタッフ〉

脚本 包朝賛

演出 展敏
音楽顧問
作曲 劉建寬
唱腔デザイン
舞台美術 戴曉雲、許希稷
照明 王魯杭
衣装 藍玲、張穎
振付

〈主たる配役〉

春月 夏利群
燕子 趙小衛
七嫂 趙燕萍
天宝 趙愛娟
金鳳 馮軼輝

〈所感〉

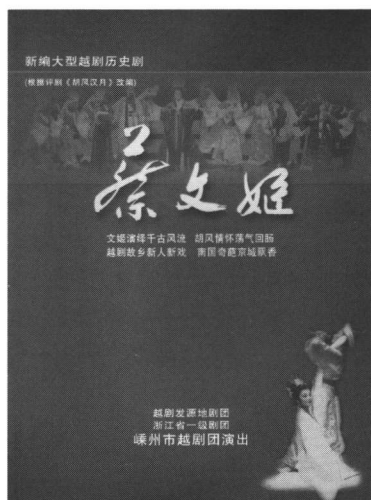
実子を失くした苦勞人の母親とそれを支えるけなげな養女が主役。そのためパンフでは春月と燕子が前面に配置されているが、舞台では馮軼輝演じる金鳳の姑いびりが痛快で精彩を放っていた。わがまま娘に手を焼く実家の父親と逆玉の輿に乗って妻に頭の上がらない婿の連帯ぶりが笑いを誘う。実家の母親が春月の味方をして金鳳を諷める態度に、子供を育てた経験を持つ女性の連帯感を感じさせる。

〈備考〉

杭州蕭山国際空港から約40分の郊外にそびえる新しい劇場(写真)。だが観客の観劇態度は近代化せず。芝居を観ながら食べる、しゃべる、走る。近年めずらしいほどの騒がしさ。上演中に急に老人がかぶりつきまで歩いていき、終演までずっと舞台を見上げているのには、驚いた。役者もさぞやりにくかっただろう。

13 10月22日(日)

演目名 『蔡文姫』



劇場(場所) 嵊州芸術中心(嵊州)

上演時間 2時間10分

上演団体 嵊州市越劇団

チケット 非売(配布)

プログラム 有 無料

観客 老若男女、子供や学生も多い。近所の人々か。ほぼ満席

〈内容〉

蔡文姫は東漢の著名学者蔡邕の娘。本人は博学多才、琴の名手女詩人、匈奴の左賢王妃として嫁入りさせられる。そこで一男一女をもうけ、幸福に暮らしていた。やがて曹操が遣いを寄越し、父の残した仕事のために漢に戻るようにとの指令が下る。愛する夫と故郷への思いに引き裂かれる蔡文姫。だが左賢王は「お前はお帰り。私がこの地で子供を育てる。来世があるものならば、又二人で暮らそう」と、別れを告げる。蔡文姫は自分の代わりに琴を持って使者を帰らせようとするが、夫は胡漢の間にしこりが残るからと彼女を送り出す。ひざまづき、足元の砂を両手ですくい泣く蔡文姫。夫の笛に妻の琴が唱和する。男社会の都合で結婚させられ、別れさせられる女性の悲劇と何ものも引き裂くことのできない夫婦愛を描く。

〈スタッフ〉

脚本 姜朝皋

演出 謝平安

副演出 汪静仙

音楽顧問

作曲 劉建寬

唱腔デザイン 陳均

舞台美術 何礼培

照明 周正平

衣装 藍玲

振付 段建平

芸術指導 金采鳳

〈主たる配役〉

蔡文姫 黄美菊

左賢王 裘巧芳

董祀 劉志霞

〈所感〉

2006年の国家精品に選ばれた昆劇『班昭』(楊小青演出)といい、この『蔡文姫』といい、大学者を父に持つ才女が女の幸福を捨てて父の偉業を継ぐというストーリーは、中国では一つのジャンルをなしているようだ。偉大な父の娘に生まれてしまった悲劇が、成すべきことをもたされてしまった才女の幸福感や価値観として提示され、現代的なテーマとなって観客に迫ってくる。それ

が名演出家の手を経ると、理に走りすぎず、押さえた美となって舞台に厚みを与える。前半、自分と同様に匈奴に嫁いだ王昭君の陵墓で自問する場面及び民族の壁を越えて彼女個人を求める左賢王の純愛とそれを受け入れる場面が美しく、心を打つ。

〈備考〉

主役の黄美菊が登場したとたん、嵐のような拍手。嵊州は袁雪芬、尹桂芳、範瑞娟など女子越劇の第一世代を輩出した越劇の故郷。この劇団は1951年に創設、これまでも何英、裘巧芳など梅花獎受賞者、国家一级俳優を多く輩出している浙江省一級劇団である（パンフによる）。3月に筆者が訪問した時は楊小青演出で『書聖王羲之』を作っていたが時間的に間に合わなかったようで、コンテストには旧作の『蔡文姫』を出品した。

14 10月23日（月）

演目名 『梁山伯与祝英台』

劇場（場所）紹興大劇院（紹興）

上演時間 2時間15分

上演団体 浙江省小百花越劇団

チケット 160元、120元、80元、50元、30元

プログラム 有 無料

観客 9割 女性多い



〈内容〉

「中国のロミオとジュリエット」と呼ばれる古典名作。家の中で女性らしい生活をするよりも男性同様に杭州で勉強したいという活発な女性祝英台が主人公。男装して勉学のために杭州に向かう道中に梁山伯と出会い、「女性も勉強をするべきだ」と語る彼に強い好意を抱く。ふたりは兄弟の契りを結び、祝英台は女であることを打ち明けないまま同級生として過ごした。三年後、父に帰郷を促された彼女は実家に戻る。

帰郷の前に彼女は師の夫人にふたりの仲人を頼み、結納の品として玉で作った蝶々の扇子飾りをあずける。実

家に帰る彼女を送り、塾に戻った梁山伯は夫人から祝英台が女性で、彼と結婚したがっていると聞かされる。梁山伯は大喜びで求婚に向かうが、そのときすでに祝英台には他家との縁談が進んでいた。

父親から家柄が釣り合わないと言われた梁山伯はショックのために病死し、祝英台は自分が死んだら彼のお墓に入ることを誓う。嫁入り当日、祝英台が彼のお墓参りをすると突然の雷鳴に墓が二つに裂け、彼女はためらいなくその墓に身を投げ自害を果たす。その後、二人は蝶になって結ばれる。

〈スタッフ〉

脚本 馮潔、趙和平、張益山

演出 郭曉男

音楽顧問

作曲 翁持更、劉建寬

唱腔デザイン 胡夢橋

舞台美術 黄楷夫、房駿駒

照明 邢辛

衣装 王秋平

メイク 郭敏

小道具 練成

振付

〈主たる配役〉 ダブルキャスト

梁山伯 茅威濤（魏春芳）

祝英台 陳曉紅（周艷）

祝員外 唐柯娣

師母 洪瑛

〈所感〉

茅威濤率いる浙江省越劇“小百花”演出団が威信とお金をかけてつくりあげた舞台。群舞、下から吹き上げる蝶の群れ、向かい合わせの二人という得意のシーンが多用される。美術は鉄で作られたツタと花がからむオブジェがジャングルのように額縁舞台の四方を取り巻いている。豪華だが、筆者は『梁山伯与祝英台』にふさわしい優美さよりも、冷たさを感じ違和感を持った。

もっとも馴染めなかったのは、二人が出会う「草橋結拜」のシーンである。経典とされる範瑞娟・袁雪芬版では、「女性も勉強するべきだ」と言う梁を「女性の生き方を支持してくれるよき理解者」として祝英台が心を寄せ、梁は気のあう弟分として兄弟の契りを交わす。だが本作では二人は互いの美貌に一目ぼれし、恋に落ちる運命だったことが強調されている。しかし、年齢にふさわしい貫禄を備えた茅威濤に「青春の輝き」は感じられず、祝英台を男性だと信じている時点で恋に落ちるという設定では、まるで美少年に目をつけた王様のような。また陳曉紅の演技も肩にもたれる、手をつなぐという身体接

触が多く、初々しい華やぎよりも大人の色っぽさを感じさせた。

〈備考〉

茅威濤の夫である郭曉男の演出はいつもそうだが、越劇の枠を破って新しい芸術を作り上げようとするあまり、越劇本来が持つ観客の共感と呼び、感情を掻き立てる（煽情する）要素を捨て去ろうとする。その結果、彼の作品にはそれなりの形式美はあるが、感動がない。話劇や、地方劇でも男性を描いた『金勇と蜉蝣』（淮劇）ではすぐれた才能を見せた郭だが、その作風は越劇の根幹に関わる部分が欠落しているように思われてならない。

15 10月24日（火）

演目名 『五女拜寿』

劇場（場所） 紹興劇院（紹興）

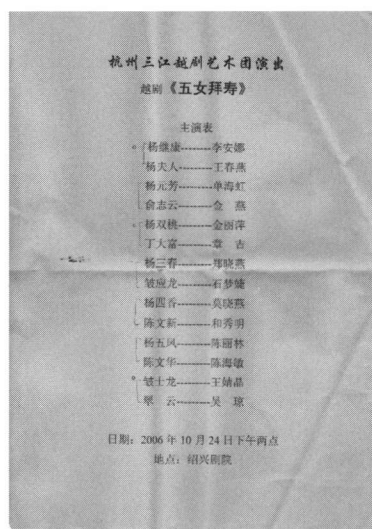
上演時間 2時間15分

上演団体 杭州三江越劇芸術団

チケット 無料

プログラム 有 無料

観客



〈内容〉

中国語版「リア王」。戸部侍郎楊繼康の60歳の誕生日の宴席に5組の娘夫婦が、それぞれ立派な祝いの品を持って訪れ、どれほど両親を愛しているかを述べる。三女だけが養女で貧しい受験生皺応龍と結婚、両親も貧しいプレゼントが気に入らず、冷たい。席上、父が失脚したことが告げられ誰が両親を引き取るかでもめる。結局誰も引き取らず、夫婦は追い返した三女の嫁ぎ先を尋ねる。途中夫婦は寺で休み、腰元の翠雲が物乞いに出かけるが、雪の中で行き倒れ、皺応龍の弟皺子龍に救われる。そのおかげで三女と両親は無事再会を果たす。その後、楊繼康は復職、夫人の60歳誕生日の宴席に再び一同が

集まる。その中には翠雲と結婚した皺子龍の姿もあった。

〈スタッフ〉 不詳

〈主たる配役〉

楊繼康 李安娜

楊夫人 王春燕

皺士龍 王婧晶

翠雲 吳琮

〈感想〉

忠実に浙江省越劇小百花演出団の同作品を忠実に再現。特に皺子龍が気絶している翠雲の看病をする「姜湯」の場面では、純情な子龍が恥ずかしがって、倒れかかる彼女をよう抱き止めず、思わず背中から受け止める動作まで80年代の茅威濤を忠実に再現している。この作品は文革後始めて香港上演作品となり、その後映画となって、浙江省越劇小百花演出団の名を全国に知らしめた重要な作品である。また北京上演によって茅威濤が第二回梅花獎を受賞し、停滞していた戯曲界全体の救世主と目された記念の作品でもあることを考えると、この作品を越劇節のコンテスト出品作に選んだ同劇団の意気込みが感じられる。また、この作品には越劇の流派すべてが盛り込まれており、多くの出演者一人一人に見せ場が用意されている。幅広い陣容を供える劇団にとっては、ぜひやってみたい演目であろう。

老生李安娜は声がよく、芸達者である。再び地位を取り戻した両親をみて、辛い時期に特に冷たくあたった次女夫婦がすり寄るがきっぱりと拒絶し、家から追い出す両親に観客は溜飲を下げる。親不孝で薄情な実子より、やさしい養子を大事にするという物語は越劇ではよく見るが、大衆の心情に触れる思いがする。

〈備考〉

アパレル会社の社長が趣味で創設した、まったくの民間劇団。今回の20本には3つの民間劇団が残っているが、その成立は三種三様である。嵊州群芸越劇団は農村巡業を主として20年の歴史を持ち「優秀民営劇団」として表彰されている。上海肖雅文化芸術有限公司はトップ俳優が作った個人劇団。杭州三江越劇芸術団のように篤志家による創立は非常にめずらしい。報告者は2006年3月に別作品のリハーサルを見学したことがあるが、そのときよりも格段の進歩を遂げていると感じた。当日のパンフはA4一枚、配役しか記載されておらず今演劇祭中もっとも質素だった。数量も不足して、途中でコピーして配布したが、それは予想以上の観客が入ったということである。各俳優に固定ファンが付いているらしく、最前列で花束をかかえている。拍手の量も俳優によって

異なる。演劇学校卒業すぐから付いたファンがその俳優の成長を楽しみに伴走するという、宝塚的な関係が伺われる。

16 10月24日(火)

演目名 『天道正義』

劇場(場所) 紹劇芸術中心(紹興)

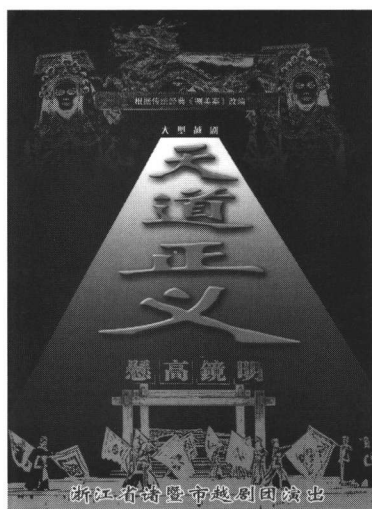
上演時間 2時間 15分

上演団体 浙江省諸暨越劇団

チケット 120 元、80 元、60 元

プログラム 有 無料

観客 満席、男性多し



〈内容〉

京劇『劉美案』の改編作。北宋時代、貧乏書生の陳世美は科挙に受かって出世し、すでに妻子持ちであることを隠して、公主の婿になる。糟糠の妻秦香蓮は行方不明の夫をたずねて子供とともに上京、出世した夫と再会する。だが陳世美はしらばくれるだけでなく、口封じに彼女を殺そうとする。皇室の権力に負けず、彼女の無念を晴らしてくれる大岡裁きが見ものの包丞もの。

〈スタッフ〉

脚本 顧頌恩

演出 楊小青

音楽顧問

作曲 陳国良

唱腔デザイン 胡夢橋

舞台美術 戴曉雲

照明 周正平、周奇期

衣装 余芳

メイク・ヘアデザイン 胡亜莉

〈主たる配役〉

秦香蓮 楼明迪

陳世美 何惠麗

包丞 張誠殷

韓琪 蔡鉄萍

〈所感〉

かつて評劇の「秦香蓮」を卑見したときに、延々と泣いてすがりつく妻の粘着質ぶりに辟易したことがある。こんな女だと男も逃げだしたくなるだろうと陳世美に同情を禁じえなかったのだ。だが今回は、顧頌恩の劇本が主人公を凛々しくかっこいい女性に生まれ変わらせている。越劇の秦香蓮は「捨てないで、私を認めて」とただすがりつくだけの無力な女ではなく、子供達のために言うべきことはきっぱりと言う、人間としてのプライドをもつ毅然とした母親である。「彼が私達を要らないというなら、私達をもっと要らない。私のいるところが家なのだから」のセリフに、怒濤のような拍手。恩ある皇太后に懇願された包丞は、自分の俸収を与えるかわりに訴えを引き下げるよう秦香蓮をなだめる。だが逆に秦が、「50 両で買えなかったものでも 300 両なら買えるというのか」と詰め寄る場面では、「好!」の声が乱れ飛ぶ。最後は観客総立ち。熱気。カーテンコールでは舞台前に押しかける人が何層にもなっている。それらに中高年男性客が多いのが、ファンに群がる上海越劇院や浙江省小百花越劇団とは異なっている。

〈備考〉

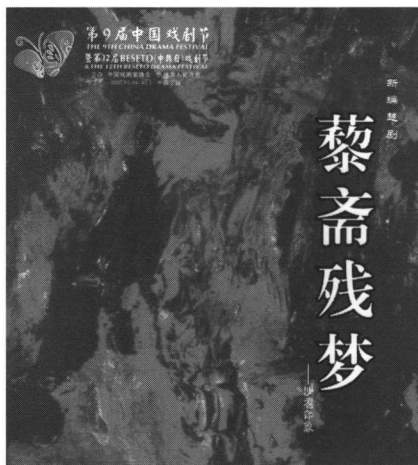
秦香蓮役の楼明迪は、「トップ 10 俳優」の投票に当たり、審査委員たちが「あれは誰だ? どういう字を書くのだ?」と大騒ぎしたというまったくのダークホース。この劇団には『西施』(2000 年、楊小青演出)という大ヒット作品があるが、その後主役の周柳萍が紹興越劇団に移籍。劇団は主力スターを抜かれて、存続の危機に陥った。それが残された若い俳優にとってはチャンスとなった。今回の越劇節では市の全面的サポートを得て、楊小青を演出に招き、劇団起死回生の作品創りにとりくんだ。だが実際問題として経費も団員も不足し、最後の裁判の場面では俳優をしたこともない団長までが衣裳を着けて舞台へ上がったという。よい芸術作品を作り、それによって地方都市の威信を高めようとする、芸術と政治の幸福なパートナーシップがあつてこそ生まれた作品だといえよう。

17 10月25日(水)

演目名 『蔡斎残夢』

劇場(場所) 寧波鄞州文化芸術中心(寧波)

上演時間 2時間 40分



上演団体 寧波鄞州越劇団、上海越劇院一団

チケット 180 元- 30 元

プログラム 有 10 元

観客 9 割、満席に近い

〈内容〉

ご当地寧波鄞州が生んだ国際的な画家沙耆（1914-2005）の一生をもとにしたフィクション。沙耆は徐悲鴻の勧めで 1937 にベルギー王室美術学院に留学、画家として高い評価を受ける。ピカソとも交流をもち、2 度の大戦中はヨーロッパで民族運動に参加、46 年に帰国した。作品は留学前の新婚生活、留学中の革命運動と恋愛、帰国後盲目となった母との再会、精神異常発生後、懊悩のなかで死を迎えるまでを描く。

〈スタッフ〉

脚本 金青峰、張勇、金琪軍

演出 伊天夫、陳冠厚

音楽顧問

作曲 藍天

唱腔デザイン 陳鈞

舞台美術 胡佐、舒福君、李岸醒、張旻

照明 伊天夫、劉海宝、葉琰舜

衣装 王笠君、姚惠原

振付 信洪海

〈主たる配役〉

沙耆 張志剛

孫氏 陳萍

喬伊糸 張海英

徐老師 許傑

モデル 顧俊艷

〈所感〉

4 幕、絵のモデルとしてオールヌードの女性が舞台上に登場。小さな回り舞台がぐるりと一周する間の一瞬のことだが、越劇で初めての衝撃的場面。内面の悪魔と天使

が交互にささやきかけ、心が引き裂かれるという趣向。黒い衣裳の悪魔がわかり易すぎて子供っぽい演出に感じた。

1 幕で新婚の妻と熱愛振りを見せながら、留学すると外国人女性と恋に陥る愛国主義の色男。それを嫌味なく見せ、さらに同情すら引き起こすためには、主役に文句を言わせないだけの技量・容貌が必要になる。それができるのは今の越劇界では趙志剛をおいてほかにはあるまいが、古典劇と異なり現代装の化粧では年齢的にもぎりぎり、次世代の男優育成が急がれる。

〈備考〉

寧波の郊外にそびえ建つ劇場は新しく、吹き抜けの天井まで届くステンドグラスがすばらしい。デザインが『梁山伯与祝英台』であるところが、当地の越劇への思い入れを感じさせる（写真）。パンフレットには本作品の主演二人が表紙となった「中国戲劇」2006. 2 月号がつき、それとは別に本作品の VCD も販売されていた。ロビーには沙耆の作品が展示され、当地の英雄を誇る様子うかがわれた。

18 10 月 26 日（木）

演目名 『女兒湖』

劇場（場所） 紹興劇院（紹興）

上演時間 2 時間

上演団体 南通芸術劇院越劇団

チケット 80 元、50 元、30 元、20 元

プログラム 有 無料

観客 3 割の入り。空席が目立つ。

〈内容〉

辺境地域の教育がテーマ。21 世紀になっても滇西高原の女兒湖のほとりに住むナシ族は原始的な生活を守って



いる。時代に取り残された生活を送る子供達のもとへ、都会から女性教師がやって来る。成績優秀な阿桑は進学を勧められるが、貧困と病にあえぐ母親の前では素直に従えない。自分の生活を犠牲にして辺境の子供を育成しようとする、健気な教育者をたたえる作品。

〈スタッフ〉

脚本 張貴馳

演出 周世琮

音楽顧問

作曲 王嘯水、申旭光

唱腔デザイン 朱順宝、万小健、張樂天、呉芸声

舞台美術 田桂芳

照明 王大慶、陳友軍

衣装 田桂芳、孫佩玉

化粧 田桂芳、胡巧玉

振付

〈主たる配役〉

阿桑 黄曉萍

景鳳 劉芳

格姆 周淑英

阿珠 陳麗英

〈所感〉

辺境地域の教育に一生を捧げる都会出身の教育英雄をたたえる作品は、地方劇ではよく取り上げられる。都会との経済格差と教育問題は辺境地域にとって最重要のテーマである。ナン族の原始的なダンスが越劇の曲が流れる中にはまり込むというミスマッチに、越劇の普及ぶりを知り驚かされた。

〈備考〉

偶然隣の席に劇団の団長が座っており、日本から来たと知ると、劇団がいかにがんばっているか、南通市がどれほど発展したかを熱く語ってくれた。空席の多いことよりも、このコンテスト最終 20 本に残った喜びのほうはずっと大きいことが伝わる。ここに来るまでに彼が乗り越えてきた経済的、政治的困難がしのばれた。

19 10月26日(木)

演目名 『心比天高』

劇場(場所) 紹劇芸術中心(紹興)

上演時間 1時間50分

上演団体 杭州越劇院

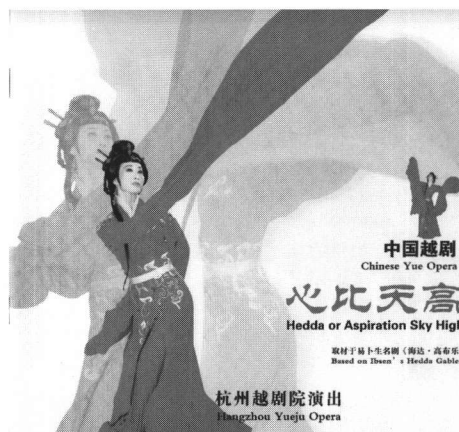
チケット 180 元、120 元、80 元、50 元

プログラム 有 10 元

観客 50% の入り

〈内容〉

父の私塾で才華を誇った海達は同級生文柏と恋仲だっ



たが、彼は仕官もせず放浪の旅に出てしまった。父の死後、海達は頼る者がなく凡庸な思孟に嫁ぐが、人がいいだけで出世欲もない夫に不満。突然文柏が帰郷すると、彼は思いがけず出世しており、しかも自分の従姉妹と結婚するという。従姉妹は家柄学問ともに海達にはるかに及ばぬ凡人だが、心底文柏を愛しており幸福そうだ。嫉妬と後悔に悩む海達は二人の男の運命を変えようと父の友人白大人に相談して画策。承諾した白大人から関係を迫られ、プライドの崩れた海達は自殺する。

〈スタッフ〉

脚本 孫恵柱、費春放、呂靈芝

演出 志濤、展敏

音楽顧問

作曲 劉健寛

唱腔デザイン 劉健寛

舞台美術 劉杏林

照明 周正平

衣装、メイク: 藍玲

振付 段建平

打楽器デザイン 阮明奇

〈主たる配役〉

海達 周好俊

思孟 陳雪萍

文柏 徐銘

白大人 石恵蘭

〈所感〉

白と黒のシンプルな舞台の中でシルエットの美が印象的。周、俊は美しく、プライド高く傲慢な海達をリアルに演じる。話劇ならば懊悩する美女の物語もめずらしくはないが、越劇の観客にとっては彼女の悩みはあまりに特権階級的にみえ、共感を呼ばなかった。太鼓と琵琶の伴奏はシンプルで作品とよくあっている。傲慢でプライド高い海達、妻の顔色を見ておろおろする人のいい思孟は陳雪萍のはまり役。年甲斐もなく色気を出す白大人の

石恵蘭も達者なところをみせ、本劇団俳優の層の厚さを感じさせた。

〈備考〉

本作はイブセン『ヘッダ・ガブラー』に取材しており、2006年イブセン没後100周年イベントに際してノルウェーで上演、大好評を博した。楽隊は衣裳を着けて舞台袖で演奏し、少人数ながら効果的である。話劇の思想性と東洋エキゾチシズムが交じり、西洋人には非常に魅力的な舞台であったろう。越劇としてはテーマが頭でっかちな印象で、国内のフェスティバル向きではなかったかもしれない。だが、主演周、俊の魅力をじゅうぶんに活かしており、翻訳物の越劇作品としては新境地といえるだろう。

20 10月26日(木)

演目名 『柳毅伝書』

劇場(場所) 蕭山大劇院(杭州)

上演時間 2時間15分

上演団体 南京市越劇団

チケット 120元、80元、60元

プログラム 有 無料

観客 80%



〈内容〉

竜女三娘は水不足にあえぐ農民のために勝手に雨を降らして竜王の怒りを買ひ、その罰に人間界に落とされた。通りすがった柳毅は科挙を受けに行く道中だが、彼女に同情して洞庭湖の竜宮まで手紙を届けに行くことを承知する。手紙を受取った両親は娘かわいさに戦争も考えるが、柳毅が間に立って円満解決する。恩人のために竜宮では大宴会が開かれるが、柳はお礼のための行動ではないからと金も宝も受取らない。それでは姫を嫁にと

言われ、彼も美貌の彼女に心を奪われるが、ここで結婚しては大義のために手紙を運んだことが嘘になる、と我慢して竜宮を辞する。実家では母が眼病を患っていたが、三姑という竜女三娘そっくりの女性が真珠を使って治してくれた。そのお礼にと柳毅は彼女に結婚を誓うが、彼は竜女三娘が忘れられない。彼女への思いを吐露していると、実は三姑の正体が竜女三娘だったことが判明して、めでたしとなる。

〈スタッフ〉

脚本 張弘、計大為、謝光寧(執筆)

演出 陳明正、韓林根

音楽顧問

作曲 呉小平、謝子華

唱腔デザイン

舞台美術 俞輝、張海豹

照明 伊天夫、楊慶錦

衣装 藍玲、王笠君

振付 劉滔

〈主たる配役〉

柳毅 竺小招

竜女三娘 陶琪

〈所感〉

幕開き、紗幕が舞台前方に置かれ、龍の暴れる様子、雨、波、夕焼けなどが描かれる。その後もスクリーンは多用される。色鮮やかな華やかな舞台なのだが、各人の衣裳の色合いが原色に近く、化粧方法や女優の体型を含め、レトロな印象を与える。竺小招の登場に大拍手。1940年代の越劇改革に参加した「越劇十姊妹」の一人、竺水招の娘である。10人の中でジュニアが越劇俳優になったのは彼女だけ、という特別な俳優だ。

〈備考〉

初演は54年、南京市越劇団オリジナル作品で62年に映画化されている。「書生が竜女三娘の手紙を運ぶ」というだけの民間故事を、ここまで大きな作品に仕上げている。観客にとっては熟知した作品で俳優の技量を楽しむ作品。母親の演じた演目を娘と比較するという歌舞伎ファンのような楽しみ方ができる作品でもある。初演以来、これまでに数千ステージをこなした經典演目。

21 10月27日(金)

演目名 『玉卿嫂』

劇場(場所) 杭州劇院(杭州)

上演時間 2時間20分

上演団体 上海越劇院

チケット 160元、120元、80元、50元、30元

プログラム 有 無料



観客 8割の入り。女性70%、男性30%か。

〈内容〉

30歳農婦玉卿嫂はお屋敷で坊っちゃんの乳母として働いている。未亡人の彼女は、実は10歳年下の病弱な男性慶生を匿い養っている。弟でもあり夫でもある彼の存在が、不連続きの彼女の支えとなっている。だがある日慶生は若い女優と恋愛し、この生活を清算して上海に行きたいと言い出した。怒り、嘆き、嫉妬する玉卿嫂は彼の希望を拒否し、なんとしてでも自分の手元に置こうとすがりつく。最後の別れに抱いてとせがまれた慶生は彼女を抱きしめ、その簪で首を刺される。玉卿嫂は彼の死体の傍らに横たわり、自ら命を絶つ。

〈スタッフ〉

脚本 曹路生（原作 白先勇）

演出 徐俊

音楽顧問

作曲 金復載

唱腔デザイン 陳鈞

舞台美術 徐海珊

照明 潘家瑜

衣装 黄耘璞

振付 孫大西

〈主たる配役〉

玉卿嫂 方亜芬

慶生 齊春雷

金燕飛 陳湜

滿叔 許傑

〈所感〉

台湾作家白先勇の原作を映画化した後の越劇化で、もともとは素朴な農婦の純愛を描いた作品である。だが、ここでは不運な人生の中で、やっと手にいれた年下の男性との恋愛に命をかける中年女性のエロスが主題とさ

れ、これまでの越劇作品では描かれなかった怖い女性が生まれている。男に尽くして捨てられる可哀想な女性と思いきや、欲しいものをしっかり握り締めて手放さず、逃げようとする男をからめとって殺してしまう。不幸な女性の強さを方亜芬が美しく表現。また、今の生活からの脱出を願いつつ、結局姉さん女房のエロスに辛め取られる、可愛いだけで無力な男を演じる齊春雷が、うまい。

終演後は女性ファンが舞台にどっと詰め掛け、上海越劇団の人気を見せ付けた。

〈備考〉

脇を固める男性俳優に感心。自分に見向きもしない玉卿嫂を愛し続ける満叔役の徐潔、新しい人生を望みながら玉卿嫂の情欲になすすべなく飲み込まれてしまう慶生役の齊春雷は、出すぎず確実な演技で方亜芬の魅力を引き立てる。二人とも『蔡斎残夢』でのわざとらしい役柄よりも俳優の力量がずっと生かされている。越劇における男優のあり方について、趙志剛とは異なるポジションを示唆しているように思われた。

本来玉卿嫂を演じるはずだった何賽飛の急病で、『祥林嫂』上演中の方亜芬が抜擢されたという経緯がある。本作品で、方亜芬は2度目の上海の白玉蘭賞を受賞。06年には第4回中日演劇友誼賞も受賞し、上海越劇院が次の梅花獎へともっとも力を入れている人である。今後とも袁派の正統派として、内心に情熱を秘めた女性像の創造が期待される。

22 10月27日（金）

演目名 『越女三章』

劇場（場所） 紹興大劇院（紹興）

上演時間 2時間5分

上演団体 紹興小百花芸術中心



チケット 160 元、120 元、80 元、50 元、30 元

プログラム 有 無料

観客 満席

〈内容〉

タイトルどおり、越国出身の有名女性 3 名を描いたオムニバスだが、実際の主役はこの 3 人の相手役を務める男役の呉鳳花である。前半 2 本は 90 年代の楊小青の名作『西施断纜』『陸游与唐琬』を本の名場面を切り取り、楊小青本人が手を加えてまったく趣きが変わっている。『梁山伯与祝英台』は 2006 年 3 月に一度仕上がった台本からも大幅に書き換えられていた。

〈スタッフ〉

脚本 顧頌恩

演出 楊小青

音楽顧問

作曲 王天明、湯小東

唱腔デザイン 李燕華

舞台美術 戴曉雲、許希稷

照明 周正平、顧宝根

衣装 藍玲

メイクデザイン 胡亜莉

振付 佟叡叡、段建平

〈主たる配役〉

西施 周柳萍

唐琬 呉素英

祝英台 陳飛

範蠡・陸游・梁山伯 呉鳳花

〈所感〉

この作品も楊小青演出だが、『天道正義』が女を見せる芝居なら、『越女三章』は男を見せる芝居といえるだろう。三人のタイプの違う女優を相手にし、ベテランの演技力を備えながら青春の美を保っている呉鳳花の魅力をみごとに昇華させたオムニバス作品である。

①『西施断纜』

母国のために呉国に嫁いでくれと恋人にひざまづく範蠡。あなたの頼みならばと決意する西施。10 年前の『西施断纜』に比べると、西施はずいぶんあっさりとした明るい旅立ちである。これも懊悩する西施の芝居ではなく、女に無理を承諾させる男の芝居になっているからだろう。群舞による水袖の技をたっぷり見せる。

②『唐琬遺恨』

舞台中央に陸の書が一面に書かれた紗幕。その奥、20 人の書生。平平仄仄のリズムにあわせるダンスがユーモラス。茅威濤版との違いは、陸が「三年待ってほしい」と唐琬にあてた手紙にある「三年」の文字を母親が「百年」と書き換えたことに、唐?が気がついていただろうか

という点である。茅威濤版では唐?はそのことを知っていたが、そこまで姑に嫌われていたことを知り二人の仲を諦めたという演出だった^②。だが、呉鳳花版では二人とも母の言葉にすっかりだまされている。そして二人同時にそのことに気付く。そこに騙され易い、単純な二人に若さゆえの悲劇性が突出して、呉鳳花のもつ真っ直ぐで純な若者のイメージに似合っている。陸游が筆ではなく水袖で文字を書くのだが、男役がこれほど派手に水袖使うのははじめてみた。『陸游与唐琬』が楊小青・茅威濤のコンビ作品の中でも傑出した名作であるため、茅威濤とはまったく陸游を創りあげようとする演出家の意図が感じられた。

③『英台祭兄』

梁が死んだところから回想シーンへ入るという構成が新鮮。古典の梁祝をきちんと踏襲し、観客の心をつかんでいる。学問を志す女性とその生き方を支持する男性の出会い、男同士としてくつろぐ塾での場面、祝の謎かけにピンとこない梁をからかう「十八相送」と、名場面を押さえた上で、離れて暮らすわずかの間に成熟した男女の感情を爆発させる「楼台会」では、しっかり観客の心を掻き立て、カタルシスを与えてくれる。短い作品ながら、いい越劇を見たという満足感に酔った。最後は真っ白の世界から一転、天井から吊り下げられたリボンを身体に巻きつけた男女が回転する雑技団も参加して、色鮮やかなフィナーレ。

〈備考〉

カーテンコールで、審査委員の一人が舞台袖に駆け寄り、しきりに 4 人の主役に手を振り拍手をしていた。審査員は普通芝居が終わるとカーテンコールも見ずに劇場を去るのだが、このような個人的な表情を見たのは初めてのことだった。

23 10 月 28 日(土)

演目名 閉幕式と『越女三章』

劇場(場所) 紹興大劇院(紹興)

上演時間 2 時間 5 分(『越女三章』のみ)

上演団体 紹興小百花芸術中心

チケット 非売

プログラム 有 非売(座席に 1 部ずつセッティング)

観客 6 割の入り

〈内容〉

閉幕式では 20 本の作品について金・銀・銅賞劇目の発表、「トップ 10 俳優」「トップ 10 新人俳優」の発表に続き、特別賞が発表された。各項目内での順序は得票順。その後、『越女三章』の上演が行なわれた。

金賞劇目：『梁山伯与祝英台』、『玉卿嫂』、『柳毅伝書』、

付けになった。これまで越劇は社会制度の中で抑圧される善良な女性を多く描いてきた。だが不幸な女性が必ずしも善良なだけのはずはなく、その境遇にぎりぎりまで耐えた女性が爆発したときの恐ろしさを、方亜芬は鮮やかに描いて見せた。性的にも解放されてきた21世紀上海ならではの新しい女性像であった。

第五に、紹興市のがんばりと紹興小百花越劇団鳳凰花の新しさ。近年浙江省の発展ぶりは目を見張るものがあるが、紹興は観光都市として古い町の落ち着きを残しつつ清潔で文化的な街づくりを指向している。越劇の故郷

として毎年越劇節を開きたいという意向を表明しており、国内外の越劇ファンを迎えもてなす経済力を感じさせた。

呉鳳花はこれまで武（立ちまわり）のできる越劇小生として注目を浴びてきたが、今回はその個性が新しい時代の小生像を創りあげていると感じた。90年代、茅威濤は社会の抑圧と闘う、悩む小生として一世を風靡した。恋愛に明け暮れたそれまでの小生とは違い、孤独と寂寞が漂う、大人の男性の知性を感じさせる小生像であり、それは女性観客自身が内包する男性性の表れと見え

2006 年中国越劇節コンクール参加全作品のチラシ
前半劇目



後半劇目



上演劇場



蕭山大劇院（杭州）



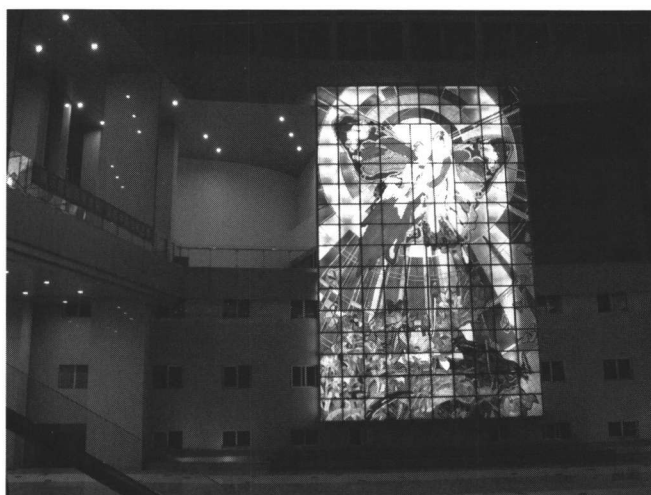
紹興大戲院（紹興）



紹興劇院（紹興）



杭州剧院（杭州）



宁波鄞州文化艺术中心（宁波）



嵊州艺术中心（嵊州）（2006年3月摄影）

楊小青組



前方左から、戴小雲（舞台美術）、楊小青（演出）、
胡亜莉（メイク・ヘアデザイン）
後方 周正平（照明）

た⁽⁴⁾。

それに対して、呉鳳花は行動する小生である。まっすぐで、明るくて、単純で、決して女性を裏切らない。女性が自分を委ねるような強く頼れる男性ではないが、軽やかな透明感をもった美しさで女性の人生に輝きを与えてくれる永遠の少年のような男性である。悩む男から、悩む女を支える男へ。呉鳳花の創る男性像は、新しい時代の女性たちの望みを体現しているのかもしれない。

最後に、審査委員に同行して出品作品すべてを観たいというわれわれのぶしつけなお願いを快く引き受けてくださった、金一波さんをはじめとする紹興市文化広電新聞出版局に対して心から感謝の意を表します。また、常に私達の生活に配慮してくださった「戯文」編集長徐沙

さん、突然闖入した外国人を友好的に受け入れ初歩的な質問にも丁寧に答えてくださった審査員の先生方にも、心より感謝いたします。

注

- (1) 越劇の歴史については、以下を参照されたい。
佐治俊彦『かくも美しく、かくもけなげな——「中国のタカラヅカ」越劇百年の夢』（草の根出版会 2006.12）
細井尚子「越劇と宝塚歌劇」（愛知大学現代中国学会 中国21」VOL.20 2004年8月）
中山文「袁雪芬と上海越劇——家と女をめぐる」『ジェンダーからみた中国の家と女』（関西中国女性史研究会 東方書店 2004年）
- (2) 中山文「楊小青と越劇の60年」（愛知大学現代中国学会「中国21」vol.20 2004年8月）
- (3) 2006年に楊小青が演出を手がけた作品は以下の通り
『虞美人』（上海越劇院）
『少年天子』（杭州越劇院）
『書聖王羲之』（嵊州越劇団）
『天道正義』（浙江省諸暨越劇団）
『紅色浪漫』（浙江越劇団）
『浣沙記』（蘇州昆劇団）
『越女三章』（紹興小百花越劇団）
『2006年中国越劇節開幕式』
『西天的雲彩』（海寧越劇団）
『胡夢橋・顧達昌作品独唱会』
- (4) 中山文「梅花獎と茅威濤」（中国文芸研究会会報300号 2006年10月）

（本報告は2006年度人文学部研究推進費によって行なわれた「サブカルチャーの場文化に関する日中比較研究」の成果の一部である）